

J2.992:4

4 of 9

* Kenjo

67/14

C

絃

上

十九の五

番組順一四・五番目 有鼓 又初番目

季一 秋

絃上

稽古順一謹及能・入門後、

所一攝津国須磨

曲趣

曲の形式の上より見れば融の類曲と云へく、内容より見れば春日龍神など一脈相通する趣あり。前後を過ぐし此も空疎の感を抱く真ふく、よく緊張を保ちながら明朗なる情緒を持統するまにこの曲の特色はあらう、真に好例の藝術傳說と稱すべきなり。

二前段は我が藝に誇りたる太政大臣師長が入唐の首途、其所に現れ来るは汐波の翁と号し、その情景は或は老の身を歎き、生業の苦しさ、御つにも適はしく、或は懐旧の涙に咽ぶも似つかはるるきた、この翁と号は少くも愁歎の色よく、須磨の浦の絶景を愛して頗る満悦の態あり、若しこの曲の真意を考へずして、その章句のみを詠吟せば、輕浮淺薄の識りと招く事あらう。

三朗かそれ品位を忘る人からず。

珍客に琵琶の渾奏を勧むる段に、源氏物語の文を巧に引用し、趣を成すこの曲とて特に妙案とす、公卿は妙音に耳を傾けたり、板底の両音を遮らむと苦を尋ふに至る、俄然情景一変する感あり。この一段を以て興趣の絶頂とも見らるべし。

この藝術的感激の妙域を過ぐすは、この曲の趣を今得し難し、後段は物語として閉言し置ざる感あり、能くは始めや事主の若殿を示すものとして必要缺くべからず、気高く爽やかた、怪しく朗かに名を給ふ姿は、師長の慢心を屈し、餘りあるく、名譽傳説をも取入れて龍神を活躍せしめは作者の手腕と云ふべし、遂に藝術傳説とて完きを待たざるを賞すべし。

大伴澤りなく川板佳く謡ふ。ケン
後は暢びく上臈かに
引まきや強う。

絃上

坐順正
(面)

一連(前) 一連(後) 一連(天皇の御前)
一連(師長の御前)
一連(同)

立衆

次第

師長
品よく
重くねす

ワキ
位カロシ

ハ重の潮路を行く船のハ重の潮路を行く

船の唐土はいづくなくもらん

太政大臣師長とは我が事なり

此の君と

申すに天下に隠れまゝさぬ琵琶琴の御

上手にや此度入唐渡天の御志有るにより。

絃上

只今津の國須磨の浦に御下向

オンゲコオ

師長 我は

さそいの名残を都の空

わき

サウシ

ヨブカ

まだ夜深きに

出で行けば

師長

末に見えたる山崎も

上

上

上

上

わき
立衆

過ぐればあとに

師長

はとなりて

道行

立衆

浪越す

袖の湊川

おち

浪越す袖の湊川

おち

まだ知らぬ方

上

上

上

上

上

上

上

上

上

上

にも我は生田の洩り来る月は木の間にて

イラ

イラ

イラ

イラ

イラ

イラ

イラ

イラ

イラ

道行
賑カミ

心づゝの旅の道されどもこれは唐土の門出
と思へば勇み有る駒の林を打過ぎて須磨
の浦にも著きにけり須磨の浦にも著きに
けり
御急き程にこれははや津の國

須磨の浦に津著にけりこれなる塩屋の主

を待ち津宿を召されりするにけり

一上
一連
一声
（聲）
前シテ
味と奥床し
さしあり

持ちかぬる。汐汲桶の苦きに又力添ふ老
の杖。波にもともや須磨の浦。月さへ
濡る。袂かな。面白や浦に入日は海
上に浮み明石の體鹽焼く蜃の類ひまぐ
も面白り小ぞや。南を遙に見渡せば雲
に續ける紀の川の小島。由良の戸渡る

.....

早船の汐追風の吹よ

シオオイカゼ

遠浦なむら住

トオウラ

吉とは松こそ霞め海越一の

手島の磯や

コヤナニワ

エシマ

昆陽難波

名は繪島と云ひながら

和

いかに筆をも及ぶべき

あり面白の浦の

あら面白の
柔かくほ

テイム同音

體や

けに

面白き延の磯屋と淡路潟

あは沖船の漕ぎ来るは雨さめれ今一返り

結上

三

奥の一み
中つたりと
爪後あり
標に誼

も汐汲め人（シシ）がそよ（シシ）陸奥の千賀の鹽（シシ）
竈は名のみして遠ければいかに運ばん伊勢島（シシ）
や阿漕が浦の汐をば度重ねても汲み難（シシ）
田子の浦の汐をばいざ下りきたんわくらには（シシ）
問ふ人有らば（シシ）佐と答へて此の須磨の浦の（シシ）
汐汲まし須磨の浦の汐汲まし（シシ）
いかに（シシ）

此の鹽屋の内へ案由申し一連誰にてわ

たりわき旅の者にてイタヤ一夜の宿を御貸オン

し一連暫く御待ちオン主に其の由申し一連

し一連かクヒビトに申しオンニ旅人の御入り一連が一夜の

お宿と仰せ一連餘りに見苦しく静カ行程に異コト

浦ウラに御宿を召されよと申し一連心得

申し。主に其の由申して少くば餘りに見苦

しく程に。異浦にて滞宿を召されぬ。

暫く。異浦とは難波の浦にてこそ申すべけれ。

これは須磨の浦にてはぬはぬ。げに。

仰むもなほ。さらば滞宿を参らせぬ。とな

た。滞入りぬ。此の君と申すに天下に

隠れも無き琵琶琴の御上手にて御入り也。
オンジョオズ

一年雨の御祈の爲神泉苑にて琵琶の秘
(シワル)
ヒトリセ
オンニリ
シンゼンネン

曲を遊ばざれば龍神もこれにめづけるにや。
リウジン

さーもの晴天俄に曇り大雨降る事終日
タイウ
シウジツ

立衆(サウ)それよりして此の君を雨の大臣とも申す
(拍子合)

とかやさずの人に御宿を参らせてこそ。
オンニヤド

（里離れ）の
一みさうり
しきふぬに
後急心
持ち

例無き思ひ出（和）彼の蟬丸は逢坂や葉屋
にて琵琶を弾き給ふ。今此の君は須磨の鹽
屋露も溜らど軒の板間逢ひ難き砌に逢ふ
ぞ嬉しかりける。里離れ須磨の家居の習
とて。須磨の家居の習とて。何事を松の柱
や竹編める垣は一重に風も溜らど痛は

よしく
とろ

一ツ

来てこの間に夢をも御覽ゆきより
 それも御覧を寐られぬまに遊ばせや
 我等も聴聞申すべし我も聴聞申すべし
 今宵は月も面白し程に夜もすがら御覧を
 を遊ばされ御心を慰められし
 いかに

絃
上

六

誰がある

眼連

御前に

わき

御琵琶を参らせ

少人

眼連

畏つるに、いかに申し上げた。今宵は月も

面白りい程に、夜もすがら御琵琶を遊ばされ

御心を慰められ少人

師長（オシナガ）（オシナガ）

此の須磨の巻の秋

かともよ。源氏此の浦に流され給ひ、始めて世の幸

きを知ると雖も

同音

また汐いまぬ世の習。置

それは浦波の音か
かく川を

くばかりなる心の露の玉の小琴を掻き鳴ら
す 師長 中 窓ひ俺びて泣く音に擬ふ浦波は思ふ
方より風や吹くらん カク それは浦波の音通ふ 同音
らゝ琴の音の ネ 音通おらし琴の音のこれは オハ
弾く琵琶の折からなれや村雨の古屋の軒の ムラサメ
板底目覚す程の夜雨や管絃の障なまゐらん イタビサシ

↑
カリン

何とて御琵琶をば彈きされて

わき
サリン

さん

が只今の雨により彈きされて

↑
シカリ
げに

げに^{モフト}おもてはさらば板屋を^{トマ}苫^フき^{オシ}御

琵琶を彈かせ申し^{（柳子合入）}いざ^{弦上}板屋を^{カリン}葺

かとしておぼ^オちと^{ンバ}は諸共に<sup>↑
連
（サリン）</sup>かゝて板屋

の其の上を^和苫^{トマ}取り^{イダ}出し<sup>↑
連
（サリン）</sup>さうと葺き

同音 （サウシ）
 鹽竈の浦の名の近々と居寄りて耳を款て
（ヤチカバ）
（カニ）

聞き居たり 何ぞ漏らぬ板屋を拵に

了は葺き給ひてぞ 今只今の板屋

を敲く音は盤渉御調子は黄鐘に程に

苦々葺き隠し今そ一調子になりて久

さればそ初よりたゞ人ならぬ思ひに心

（さればこそ）
 ユルヤカニ運
 同音
 ロギ
 （ホノリ）

結上

ハ

増々琵琶をいかに弾くかはあらぐま

所から江のほとり。岩越す浪の音や見ん琵琶

琴の思ひも寄らぬ御説かな 思ひ寄らず

もさりとては押して琵琶を賜はれば

おほぢは琵琶を調むれば 姥は琴柱を

立て竝べて 撥音爪音 ばりりりりりりりりりり

バチ音 爪音 特利ノ振アリ 大アリ

ばらりと感涙もこぼれえいとおどるばかり
なりや彈いたる彈いたる面白や（ハズンデ）師長思（ハズンデ）
ふや（ハズンデ）師長思ふや（ハズンデ）我日の本にて琵琶
の奥儀を究めつゝ大國を窺はんと思ひ（ハズンデ）事
のあきまじさやまのあたりかゝる堪能有り
ける事よ所詮渡唐を止まりんと忍びて鹽

（梅が枝に）
事ニ再ビ大

屋を出で給へばそれをも知れ琵琶琴の
心一つの嗜して越殿樂の唱歌の聲
梅が
枝にこそ
鶯は巢をく
風吹かばいかに
せん花に宿る鶯宿人の歸るをも知れで彈
いたり琵琶琴
何とて大臣殿は御見え
なぐゆぞ
は御立ちにやい
何とて

同音

（小ノリ）

トド
留め申さぬぞと

（和）おほぢと姥は走り寄り

（カツテサラシ）
琵琶

（オシ）
琴よりお袖を唯引けりや横雲の

夜はまだ深し浦の名の明してお立ちし

師長

（シノギ）

（トド）
何しに留め給ふらん。まづ此度は歸洛して

重ねて尋ね申すべし御名を名宣りおはし

（トド）
まぜ 今は何をか包むま。我弦上の主た

（今は何まか）
ぐとほを
取る

同音

りし村上の天皇梨壺の女御夫婦なり

御身の入唐止めん為夢中にまみえ須磨の

浦故院の昔の夢の誥思ひ出でよ人ごと

かき消すやうに失せにけりかき消すやうに

失せにけり

とは我が事なり此の聖代の御宇かよ唐

来序 中入

出端 (柏子三合天)

抑

これは村上の天皇

た

後シテ
品位あり
大きく
暢々諒ふ

コシ
上よりも三面の琵琶を渡さる。青山結上獅
子丸れなり。ぞ召し出て弾かせんと漫々
たる海上カイシヨオに向ひ（カシ）に下界の龍神リウジン確に聴け。
獅子丸持参仕れ（早道）獅子丸浮むと見
え（おま）かば（おま）獅子丸浮むと見え（おま）かば（おま）八（おま）大龍
馬を引き連れ引き連れ彼の御琵琶を授け

給へば師長賜はり彈き鳴らすハ大龍王も
 結管の役々或は波の鼓を打てば或は琵琶の
 名に（シシ）おふ獅子團（シシ）亂旋に村上の天皇も奏
 で給ふ面白かりける祕曲かな早舞獅子
 には文珠や召さるらん（モシジュ）獅子には文珠や
 召さるらん帝は飛行の車に乗ハ大龍馬

に輓かれ給へば師長も飛馬に鞭を揚げて
馬上に琵琶を携へて馬上に琵琶を携へて
須磨の歸洛ぞ有難き

千九百四十五年
喜多流謡曲之内

戦時下の
ホストン
館内

柳本暢弘
写之